様式２

令和6年度　調布市立石原小学校　学校評価報告書（学校長　飯島　慶裕）

学校の教育目標
○　根気よく学ぶ子　　○　なかよく助け合う子　　○　明るく元気な子
目指す学校像（ビジョン）　例）学校像，教員像，児童・生徒像
☆　子供たちの笑顔あふれる学校 （１）お互いを尊重し合いながら学ぶ学校→認められる笑顔 （２）教職員にとって，自信と誇りをもってやりがいの感じられる学校→やる気の笑顔 （３）子供にとって，安心して通える学校→安心の笑顔 （４）保護者や地域とともに歩む学校→誇れる笑顔

調布市立学校における共通した領域　＜短期的な経営目標＞

	1　豊かな心（徳）		2　確かな学力（知）		3　健やかな体（体）	
自己評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
	①　相手の気持ちを考えることを意識させ，いじめの防止並びに早期発見・早期解決する。	B	①　「めあて」「ふりかえり」「まとめ」を明示し，児童が見通しをもって学習できる指導を展開する。	B	①　縄跳び，持久走，体育の授業をとおし，日常的な運動の取組を行う。	A
	②　あいさつを励行し，先言後礼を定着させる。	B	②　授業形態の工夫に加え，児童が自ら考え，表現する場面を意図的に設定するなど，学習意欲の向上を図る。	B	②　避難訓練・セーフティ教室等を通して，安全意識を高める。	A
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価
	①　いじめを発見した場合，ほとんど１か月以内で解決したが，一部継続して見守る事案があった。	B	①　魅力ある学校づくりのアンケートで，「授業がよくわかる」の割合は５割台であった。	C	①　児童アンケートによる「運動やスポーツをすることが好きである」の項目で，肯定的な評価は８６％であった。	A
	②　児童アンケートによる肯定的な評価は９１％であったが，保護者アンケートでは６２％であった。	B	②　児童アンケートによる「授業中，自分の考えを進んで発言している」の項目で，肯定的な評価は６７％であった。	C	③　不審者対応訓練を２度行い，児童は迅速に避難できるようになってきた。	A
学校関係者評価	・　教員がいじめをしっかり認識して取り組んでいる。担任以外でも，児童の話を聞いてくれる先生がいることは評価できる。 ・　児童がしっかりあいさつができるようにするためには，学校だけでなく，家庭の協力も必要である。PTA からも，保護者に伝えるようにする。		・　基礎的な学力が身に付いていない児童がいる。定着を図ることが重要である。 ・　タブレットでは，学力が身に付くとは考えられない。工夫した授業を進める必要がある。		・　学校では，日常的な運動の取組を行っているので，ホームページなどを活用して，もっと保護者に情報発信するとよい。 ・　児童アンケートと保護者アンケートで数値に差があるのは，アンケート項目の「スポーツ」という言葉が，保護者にとって競技ととらえているためではないかと考える。	

学校の特色を生かした領域　＜短期的な経営目標＞

	4　教育機器活用による授業改善		5　特別支援教育の推進		6　地域と連携した教育活動の推進	
自己評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価	(1)　具体的な取組	評価
	①　児童用タブレットを活用し，児童が主体的に課題解決に取り組む。	A	①　個別指導計画・支援計画，就学支援シートを活用し，スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラー等の助言を受けながら，個に応じた支援を行う。	A	①　地域学習・校外学習・ゲストティーチャーを招いた授業を積極的に行う。地域行事に積極的に参加する。	A
	②　「GIGA ワークブックとうきょう」等を活用し，ＳＮＳ等の情報発信のルールや危険性を理解し，安全に情報機器を活用する知識や技能，情報活用能力を身に付けさせる。	B	２　都立調布特別支援学校との交流や副籍交流を推進する。	B	②　六踏園と情報交換を密に行い，連携しながら児童の育成を図る。	A
	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価	(2)　成果（数値目標に対して）	評価
	①　児童アンケートによる「タブレットを使った学習は楽しい」の項目で，肯定的な評価は８９％であったが，保護者アンケートでは６８％であった。	B	①　児童アンケートによる「自分には，よいところがある」の項目で，肯定的な評価は８７％であった。	B	①　地域学校協働本部の協力を得て，九九クリニックを１５回，延べ１１６人で行った。 　土曜日に行った地域パトロールでは，教職員だけでなく，２０名以上の児童が参加した。	A
	②　児童アンケートによる「タブレットのルールを守って使っている」の項目で，肯定的な評価は８９％，保護者アンケートでは８４％であった。	B	②　調布特別支援学校との直接交流は１回，副籍交流はなかった。	C	②　学校と調布学園との全体交流会を２回，富士見子ども連絡会を６回行った。地域と情報を共有しながら児童の対応を行った。	A

学校関係者評価	・　タブレットを使った学習について，学校公開やホームページ等で保護者に伝えていくとよい。 ・　タブレットだけではなく，スマートフォンを持っている児童も一定数いるので，家庭でのルールづくりが必要である。 ・外国語や音楽などの学習で，タブレットを使うことは効果的である。	・　保護者アンケートで，インクルーシブ教育の推進をもっと行うべきだとの意見があったが，学校では，調布特別支援学校との交流，ブラインドサッカー体験，ゲストティーチャーを招いて認知症問題の授業等を行っている。身体に障害のある人だけでなく，すべての人と分け隔てなく一緒に生活することを日々実践しているところが評価できる。	・　地域学校協働本部との連携は，評価できる。 ・　地域とともに子供たちを育てようと努力している。

人材育成・組織運営	
自己評価	○　不登校対策委員会を毎月１回行うとともに，「ひだまりルーム」を活用して不登校支援を行うことで，新たな不登校児童は出なかった。また，今まで教室に行けなかった児童が，教室で授業を受けるようになった。 ○　校内 OJT・ミニ研修(15 分間)を８回行い，若手教員の授業力向上につながった。 ○　今年４年目の体育主任担当教諭は，体力向上に向けた新たな取り組みを提案・実施することで，子供たちの運動に取り組もとする意識が高まった。
学校関係者評価	・　不登校支援として「ひだまりルーム」の活用は，大変有効である。子供たちにとって教室以外での居場所が確保されている。担当が，保護者の気持ち，子供の気持ちを汲み取りながら対応しているので，安心できる。 ・　若手教員が育っているのは，いいことである。今後もしっかり育成してもらいたい。

中期的な経営目標の達成状況

1　全教育活動を通して，児童一人一人の人権感覚を高める。
　→　アンケートで，９３％の児童は学校で友達と仲良く生活していると回答し，保護者アンケートでは，８４％であった。

2　児童の学習意欲の向上を図り，基礎的・基本的な学力を定着させるとともに，思考力・判断力・表現力の向上のために，指導法の工夫改善を行うために，計画的な教育活動を推進する。
　→　９４％の児童は，先生や友達の話をしっかり聞いていると回答している。自分の考えをすすんで発言していると回答した児童は６７％であるが，昨年度より１１ポイント改善した。「主体的・対話的で深い学び」を柱に，対話的活動を充実させながら，表現する力を付ける必要がある。また，基礎的・基本的な学力の定着も課題である。

3　児童自ら健康で安全に生活する力を育むために，学校・家庭・地域が連携して，交通事故，熱中症，防災（地震，風水害），不審者等に対する体制を推進する。
　→　今年度，水害や不審者対応を想定した避難訓練を行い，発生したときにどのように対応するかを学ぶ機会となった。熱中症に対する教職員・児童の意識が高まり，安全に教育活動を進めることができた。

4　ＩＣＴ機器を積極的に活用した授業改善を行うとともに，情報モラル教育を推進する。
　→　児童アンケートによる「タブレットのルールを守って使っている」の項目で，肯定的な評価は８９％であった。セーフティ教室等を活用し，１００％を目指していく。

5　関係諸機関と連携しながら，児童一人一人の課題に柔軟に対応し，育成を図る。
　→　児童相談所，子ども家庭センター「すこやか」，児童福祉施設六踏園と情報共有し，連携しながら対応している。

6　コミュニティ・スクールとして，学校運営協議会で話し合い，地域学校協働本部を活用し，地域・保護者・学校の三者が一体となって，地域に根差した教育活動を推進する。
　→　毎月１回学校運営協議会を行って，学校の課題について情報を共有し，解決策を検討してきた。また，次年度に向けての経営方針に向けても協議し，決定した。

人・組　・服務規律の徹底　　・ライフ・ワークバランスの推進
　→　さらなる徹底を図る必要がある。

次年度の重点課題

- 基礎的・基本的な学力のうち，特に九九の定着を図る必要がある。
- 学校運営協議会において協議し，地域学校協働本部と連携を図って地域学習を充実させ，児童の主体性を育む必要がある。
- 中・高学年において教科担任制を導入し，教員の専門性向上を図るとともに，多面的な児童理解につなげる必要がある。
- コミュニケーションの基本となる挨拶について，自ら進んで挨拶できるよう学校・地域で継続して取り組む必要がある。
- 児童用タブレット端末の活用方法並びに情報モラルの啓発について，継続して児童・保護者へ周知・徹底していく必要がある。